白梅学園大学・短期大学　教育・福祉研究センター研究年報　№22　20～26（2017）

論文

中学生の非行傾向行為の動向

Current Trends of Mild Delinquency in Japanese Junior High School Students

小保方　晶子

問題と目的

中学生の問題行動の１つに非行傾向行為があり、教師は日々その対応に追われている。日本における非行は軽度のものが多くを占め、2011年まで､刑法犯少年の７割以上を初発型非行（万引き、自転車盗、オートバイ盗、占有離脱物横領の４罪種をいう）が占めてきた。2010年からは、72.0％（2010年）、70.2％（2011年）、66.2％（2012年）、63.8％（2013年)、62.1％（2014年）と減少しており、2015年度は刑法犯少年の検挙人員のうち初発型非行が占める割合は60.3％である。

非行は深化していく（緑川，1999）との指摘もあり、非行を初期の段階で予防するためにも、中学校生活の中でみられる行為に焦点をあて、中学生の非行傾向について検討していくことが必要である。本研究は、少年非行の芽生えの段階での予防の対応策に資する研究を行なうことを大きな目的として2002年度からタバコを吸うなどの非行傾向行為について中学生を対象として大規模調査を開始した。中学校生活の中でみられる行為を対象として検討することで、非行が深化するのを抑止する手がかりが明らかになり、非行の初期段階での予防につながると考えられる。

本論文では、2002年度に開始し2012年度まで行った10回の調査結果から得られた非行傾向行為のデータを示し、中学生の非行傾向行為の動向について報告することを目的とする。

方　法

2002年度（調査１)､2003年度（調査２､調査３)、2004年度（調査４)、2007年度（調査５)、2008年度（調査６)、2009年度（調査７)、2010年度（調査８)､2011年度（調査９)､2012年度（調査10）に、東京都内の公立中学校の１年生から３年生を対象として調査を行った。調査４と調査５の間には３年の期間がある。各々の調査の時期と対象者については、以下のとおりである（表１－１、表１－２)。

１．調査時期と調査対象者

【調査１　2002年度】2002年７月（１学期）に質問紙調査を行った。中学校３校1623名分のデータ（１年生男子317名、女子253名、性別不明２名、２年生男子214名、女子273名、３年生男子274名、女子256名、性別不明４名）を分析対象とした。

【調査２　2003年度①】 2003年７月（１学期）に質問紙調査を行った。中学校５校2397名分のデータ（１年生男子362名、女子407名、性別不明５名、２年生男子399名、女子399名、３年生男子407名、女子412名）を分析対象とした。

【調査３　2003年度②】 2003年12月（２学期）に質問紙調査を行った。中学校５校2347名分のデータ（１年生男子363名、女子395名、性別不明２名、２年生男子388名、女子393名、性別不明２名、３年生男子385名、女子396名、性別不明３名）を分析対象とした。

【調査４　2004年度】 2004年12月（２学期）に質問紙調査を行った。中学校６校2743名分のデータ（１年生男子515名、女子428名、２年生男子

459名、女子479名、性別不明６名、３年生男子444名、女子408名、性別不明４名）を分析対象とした。

【調査５　2007年度】 2007年12月下旬～１月上旬に質問紙調査を行った。中学校６校2289名分のデータ（１年生男子411名、女子340名、性別不明１名、２年生男子372名、女子355名、性別不明３名、３年生男子392名、女子413名、性別不明２名）を分析対象とした。

【調査６　2008年度】 2008年12月に質問紙調査を行った。中学校６校2004名分のデータ（１年生男子375名、女子363名、性別不明１名、２年生男子374名、女子300名、３年生男子301名、女子285名、性別不明１名、男子の学年不明１名）を分析対象とした。

【調査７　2009年度】 2010年３月に質問紙調査を行った。中学校６校2303名分のデータ（１年生男子422名、女子383名、性別不明１名、２年生男子414名、女子397名、性別不明２名、３年生男子354名、女子314名、性別不明３名、男子の学年不明１名､女子の学年不明２名）を分析対象とした。

【調査８　2010年度】 2011年２月～３月に質問紙調査を行った。中学校４校1816名分のデータ（１年生男子314名、女子314名、性別不明２名、２年生男子311名、女子278名、性別不明１名、３年生男子305名、女子294名、性別不明４名）を分析対象とした。

【調査９　2011年度】 2011年度12月に質問紙調査を行った。中学校５校1836名分のデータ（１年生男子343名、女子324名、性別不明２名、２年生男子289名、女子304名、性別不明２名、３年生男子300名、女子271名、性別不明１名）を分析対象とした。

【調査10　2012年度】 2012年12月に質問紙調査を行った。中学校４校2012名分のデータ（１年生男子379名、女子360名、性別不明１名、２年生男子340名、女子328名、性別不明１名、３年生男子292名、女子310名、性別不明１名）を分析対象とした。

なお、調査１を除き、調査２から調査４、調査５から調査10は同じ対象者が含まれている縦断調査でもある。調査手続きは、全ての調査で同じである。質問紙、実施方法の説明を学校に郵送し、担任教師によるクラスごとの実施を依頼した。倫理面への配慮として、回答内容の秘密を保持するために、調査票とともに封筒を配布した。対象者は調査票を記入した後、各自で調査票を封筒に入れ、厳封した上で提出した。

また、全ての調査において、分析対象は全調査対象のうち無回答の項目が質問項目の３分の１以上あるものや、回答内容に不備のあったものなどを除いたものとした。

２．調査内容

非行傾向行為の項目内容は、奏（2000）の調査で、中学生の経験率で10％程度以上みられるものを参考にして作成した。「タバコをすう」、「病気などの理由がないのに学校をさぼる」、「親にかくれて酒やビールを飲む」、「子どもだけで夜おそくまで街の中で遊ぶ」、「店の品物をお金を払わずにもってくる」､「よその人の自転車を盗んだり､かってに使ったりする」である。調査１のデータ分析から､１因子構造であることが確認されたため(小保方・無藤，2006a)、以後、非行傾向行為を測る項目として使用した。

調査４（2004年度）からは、「家のお金を親にだまって持ち出す」「親の許可なく外泊する」の２項目を追加した。この項目は，著者の臨床経験から非行傾向行為にあてはまり重要な項目であると考えられたため追加することにした。この２項目を追加した後も１因子構造であることが確認されている（小保方・無藤，2006b)。調査１、調査２、調査３、調査４では、「あなたは、次のことをしたことがありますか。」という教示で、「ない」、「ある」の２件法で回答を求め、経験が「ある」と回答した子どもに対して「あなたはこの１年間で次のことをしたことがありますか」との教示で、各項目についてその有無を尋ねた。調査５から調査10では、「あなたは、この１年間の間で

表１－１　調査データの概要

	調査1	調査2	調査3	調査4
年度	2002年度	2003年度	2003年度	2004年度
調査時期	2002年7月	2003年7月	2003年12月	2004年12月
調査対象校	3	5	5	6
調査対象者数	1623	2397	2347	2743

表１－２　調査データの概要

	調査5	調査6	調査7	調査8	調査9	調査10
年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
調査時期	2007年12月	2008年12月	2010年3月	2011年2月	2011年12月	2012年12月
調査対象校	6	6	6	4	4	4
調査対象者数	2289	2004	2303	1816	1836	2012

次のことをしたことがありますか」について「１回もなかった」「１回～９回した」「10回以上した」のいずれかに丸をつけてもらった。この１年間の経験について「１回以上ある」にあてはまる者を非行傾向行為の経験者とした。

結　果

非行傾向行為の経験者の年度による変化

非行傾向行為の経験率（非行傾向行為のこの１年間の経験について「ある」と答えた者の割合）は、表２に示すとおりである。

表２　非行傾向行為の経験者（％）

	2002	2003.7	2003.12	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012
タバコをすう	8.0	4.9	6.4	5.1	5.5	5.2	4.4	6.5	5.1	3.5
病気などの理由がないのに学校をさぼる	9.3	8.7	10.0	9.5	10.3	11.3	11.3	12.0	11.7	7.5
親にかくれて酒やビールを飲む	7.7	5.5	7.6	7.2	6.0	6.7	6.5	6.6	6.2	4.1
子どもだけで夜おそくまで街の中で遊ぶ	17.4	15.8	17.7	17.0	18.9	19.3	18.6	19.1	22.3	16.6
店の品物をお金を払わずにもってくる	6.4	3.4	4.5	4.4	2.9	3.0	2.3	3.6	3.2	2.0
よその人の自転車を盗んだり、かってに使ったりする	5.8	4.1	4.7	3.5	2.8	2.8	2.0	2.8	2.7	1.8
家のお金を親にだまって持ち出す				6.2	5.3	5.6	5.6	5.2	4.6	4.3
親の許可なく外泊する				2.8	4.7	4.0	2.9	3.5	3.3	2.8

非行傾向行為の経験者が、年度によって違いがあるのかを検討するために、各々の項目の経験者についてχ^2検定を行った。結果、「家のお金を親にだまって持ち出す」を除く７項目において分布の偏りが有意であった。

「タバコをすう」（$\chi^2(9)=50.68$, $p<.001$）は残差分析の結果、2002年（8.0%, $p<.01$）、2003年12月（6.4％, $p<.05$）、2010年（6.5％, $p<.05$）が経験者が有意に多く、2003年７月（4.9％, $p<.05$）、2009年（4.4 ％, $p<.05$）、2012年（3.5 ％, $p<.01$）が有意に少なかった（表３）。

「病気などの理由がないのに学校をさぼる」（$\chi^2(9)=41.65$, $p<.001$）は残差分析の結果、2003年７月（8.7％, $p<.05$）、2012年（7.5%, $p<.01$）が経験者が有意に少なく、2009年（11.3%, $p<.05$）、2010年（12.0%, $p<.01$）、2011年（11.7%, $p<.05$）が有意に多かった（表４）。

「親にかくれて酒やビールを飲む」（$\chi^2(9)=34.52$, $p<.001$）は、残差分析の結果、2002年（7.7%, $p<.05$）、2003年12月（7.6%, $p<.05$）が経験者が有意に多く、2012年（4.1%, $p<.01$）が有意に少なかった（表５）。

「子どもだけで夜おそくまで街の中で遊ぶ」（$\chi^2(9)=40.55$, $p<.001$）は、残差分析の結果、2002年７月（15.8%, $p<.01$）が経験者が有意に少なく、2011年（22.3%, $p<.01$）が有意に多かった（表６）。「子どもだけで夜おそくまで街の中で遊ぶ」は、調査項目の中で経験者の割合が最も多かった。

「店の品物をお金を払わずにもってくる」（$\chi^2(9)=80.99$, $p<.001$）は、残差分析の結果、2002

年（6.4%，p<.01）、2003年12月（4.5%，p<.01）、2004年（4.4%，p<.01）が経験者が有意に多く、2009年（2.3%，p<.01）、2012年（2.0%，p<.01）が有意に少なかった（表７）。

「よその人の自転車を盗んだり、かってに使ったりする」（$\chi^2(9)=85.88$，p<.001）は残差分析の結果、2002年（5.8%, p<.01）、2003年７月（4.1%, p<.05）、2003年12月（4.7%，p<.01）が経験者が有意に多く、2009年（2.0%, p<.01）、2012年（1.8%, p<.01）が有意に少なかった（表８）。

「家のお金を親にだまって持ち出す」（2004年度から追加）は、χ^2検定の結果，分布の偏りが有意ではなかった（$\chi^2(6)=10.37$, *n.s.*）。割合をみると、2004年度が6.2％で最も経験者が多く、次が2008年度と2009年度の5.6%であった。2012年度が4.3％と最も少なく、次が2011年度の4.6％であった。

2004年度から項目に追加した「親の許可なく外泊する」（$\chi^2(6)=13.97$，p<.05）は残差分析の結果、2007年度（4.7％，p<.01）が有意に経験者が多かった（表９）。経験者が少ない年度は、割合をみると、2.8％の2004年度と2012年度であった。

2012年度は、χ^2検定の結果、経験者が有意に少ない項目が多かった（「タバコを吸う」「病気などの理由がないのに学校をさぼる」「親にかくれて酒やビールを飲む」「お金を払わずに店のものをもってくる」「よその人の自転車を盗んだり勝手に使ったりする」の５項目）。また、経験率は「子どもだけで夜遅くまで遊ぶ」（２番目に経験率が低い）を除き、他の全ての項目で経験率が最も低く、他の年度と異なる傾向を示した。集団による影響も大きいと考えられるため、2012年度を除き、2002年度から2004年度（調査１～調査４）を第１グループ、2007年度から2011年度（調査５～調査11）を第２グループと調査時期で２つに分類して、比較を行った（表10）。

第１グループ（2002年度から2004年度）の方が、第２グループ（2007年度から2011年度）と比較して、「タバコを吸う」、「親にかくれて酒やビールを飲む」、「店の品物をお金を払わずにもってくる」、「よその人の自転車を盗んだり勝手に使ったりする」の経験者が多い傾向があった。一方、「病気などの理由がないのに学校をさぼる」「子どもだけで夜おそくまで街の中で遊ぶ」は、第１グループより第２グループの方が経験者が少ない傾向があった。

表３　「タバコを吸う」の経験の有無と年度のクロス表

年度	2002	2003.7	2003.12	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	合計
経験あり（人数）	129	115	147	140	125	104	102	118	94	70	1144
調整済み残差	4.8	−1.1	2.3	−0.7	0.2	−0.3	−2.1	2.2	−0.5	−4.0	
経験なし（人数）	1484	2232	2150	2605	2155	1885	2188	1692	1735	1937	20063
調整済み残差	−4.8	1.1	−2.3	0.7	−0.2	0.3	2.1	−2.2	0.5	4.0	
合計	1613	2347	2297	2745	2280	1989	2290	1810	1829	2007	21207

表４　「病気などの理由がないのに学校をさぼる」の経験の有無と年度のクロス表

年度	2002	2003.7	2003.12	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	合計
経験あり（人数）	148	206	233	256	234	225	260	217	215	150	2144
調整済み残差	−1.1	−2.4	−0.2	−1.1	0.3	1.8	2	2.7	2.4	−4.1	
経験なし（人数）	1443	2162	2097	2439	2047	1770	2039	1598	1617	1857	19069
調整済み残差	1.1	2.4	0.2	1.1	−0.3	−1.8	−2	−2.7	−2.4	4.1	
合計	1591	2368	2330	2695	2281	1995	2299	1815	1832	2007	21213

表５　「親にかくれて酒やビールを飲む」の経験の有無と年度のクロス表

年度	2002	2003.7	2003.12	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	合計
経験あり（人数）	123	129	178	196	137	134	150	119	113	83	1362
調整済み残差	2.2	−1.9	2.5	1.8	−0.8	0.6	0.2	0.3	−0.5	−4.4	
経験なし（人数）	1474	2216	2164	2526	2144	1862	2148	1691	1719	1923	19867
調整済み残差	−2.2	1.9	−2.5	−1.8	0.8	−0.6	−0.2	−0.3	0.5	4.4	
合計	1597	2345	2342	2722	2281	1996	2298	1810	1832	2006	21229

表6　「子どもだけで夜おそくまで街の中で遊ぶ」の経験の有無と年度のクロス表

年度	2002	2003.7	2003.12	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	合計
経験あり(人数)	278	372	411	455	431	385	428	345	409	333	3847
調整済み残差	−0.8	−3.2	−0.6	−1.7	1.0	1.4	0.6	1.0	4.8	−1.9	
経験なし(人数)	1320	1982	1911	2221	1847	1611	1871	1466	1424	1672	17325
調整済み残差	0.8	3.2	0.6	1.7	−1.0	−1.4	−0.6	−1.0	−4.8	1.9	
合計	1598	2354	2322	2676	2278	1996	2299	1811	1833	2005	21172

表7　「店の品物をお金を払わずにもってくる」の経験の有無と年度のクロス表

年度	2002	2003.7	2003.12	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	合計
経験あり(人数)	102	81	105	119	67	59	52	66	58	40	749
調整済み残差	6.5	−0.4	2.7	2.6	−1.6	−1.4	−3.5	0.3	−0.9	−3.9	
経験なし(人数)	1492	2301	2228	2586	2213	1936	2245	1745	1775	1968	20489
調整済み残差	−6.5	0.4	−2.7	−2.6	1.6	1.4	3.5	−0.3	0.9	3.9	
合計	1594	2382	2333	2705	2280	1995	2297	1811	1833	2008	21238

表8　「よその人の自転車を盗んだり、かってに使ったりする」の経験の有無と年度のクロス表

年度	2002	2003.7	2003.12	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	合計
経験あり(人数)	93	95	108	96	63	56	46	50	49	37	693
調整済み残差	5.8	2.2	3.9	1.8	−1.6	−1.3	−3.7	−1.4	−1.6	−3.9	
経験なし(人数)	1510	2222	2190	2347	2217	1940	2255	1764	1784	1971	20200
調整済み残差	−5.8	−2.2	−3.9	−1.8	1.6	1.3	3.7	1.4	1.6	3.9	
合計	1603	2317	2298	2443	2280	1996	2301	1814	1833	2008	20893

表9　「親の許可なく外泊する」の経験の有無と年度のクロス表

年度	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	合計
経験あり(人数)	75	97	79	66	64	60	57	498
調整済み残差	−1.7	2.6	1.6	−1.4	0.5	−0.2	−1.3	
経験なし(人数)	2604	2185	1918	2233	1750	1772	1950	14412
調整済み残差	1.7	−2.6	−1.6	1.4	−0.5	0.2	1.3	
合計	2679	2282	1997	2299	1814	1832	2007	14910

表10　年度による各項目の経験者の有意差

		タバコをすう	病気などの理由がないのに学校をさぼる	親にかくれて酒やビールを飲む	子どもだけで夜おそくまで街の中で遊ぶ	店の品物をお金を払わずにもってくる	よその人の自転車を盗んだり、かってに使ったりする	家のお金を親にだまって持ち出す	親の許可なく外泊する
第1グループ	2002	↑		↑		↑	↑		
	2003.7	↓	↓		↓		↑		
	2003.12	↑		↑		↑	↑		
	2004					↑			
第2グループ	2007								↑
	2008								
	2009	↓	↑			↓	↓		
	2010	↑	↑						
	2011		↑		↑				
	2012	↓	↓	↓		↓	↓		

↑有意に多い，↓有意に少ない　　太さは、↑$p<.01$, ↑$=p<.05$

考　察

本研究で設定した問題行動は、年度が変わっても経験のある子どもたちが一定数いることが明らかになった。以下、年度ごと、項目ごとに特徴を考察する。

2002年度は「タバコを吸う」（喫煙）、「親にかくれて酒やビールを飲む」（飲酒）、「店の品物をお金を払わずに持ってくる」（万引き）、「よその人の自転車を盗んだり、勝手に使ったりする」（自転車盗）の経験者の割合が有意に多かった。対象校が３校と最も少なく、問題行動の経験者の多い学校が対象に含まれていた可能性がある。また、2001年度（調査１）は縦断調査ではなく、完全無記名調査だったので、調査対象者の回答のしやすさも影響していると考えられる。2012年度は「子どもだけで夜遅くまで遊ぶ」を除いて、他の全ての項目で経験者が少なく、他の年度と異なる傾向を示した。2009年度は2012年度の次に「タバコを吸う」、「店の品物をお金を払わずに持ってくる」、「よその人の自転車を盗んだり、勝手に使ったりする」の経験者が有意に少なかった。このように、非行傾向行為の経験者は年によって増減がある。

中学校の荒れは、学年による違いがみられることがあるが、調査対象となった集団による変化もあると考えられる。

2003年７月は「タバコを吸う」「病気などの理由がないのに学校をさぼる」、「子どもだけで夜おそくまで街の中で遊ぶ」が有意に経験者が少なかった。非行は２学期に増加する傾向がみられるので（小保方・無藤，2003）、調査実施時期が７月であることが影響していると考えられる。

「子どもだけで夜おそくまで街の中で遊ぶ」は、調査項目の中で経験者の割合が最も高かった。深夜はいかいは、飲酒、喫煙、深夜はいかい等を含む不良行為のうち、最も割合が多い（警察庁生活安全局少年課，2016）ので、それらの調査結果とも一致する。本調査の「子どもだけで夜おそくまで街の中で遊ぶ」は、「夜おそい」の時間を定義していないため、経験者の中には、非行性が強いとは限らないもの、例えば子どもだけでディズニーランドに行き遅くなった、なども含まれている可能性がある。「家のお金を親にだまって持ち出す」（金品持ち出し）は年度による有意な違いがみられなかった。経験者は「家のお金を親にだまって持ち出す」が6.2％から4.6％の間でありちらばりが小さい。「家のお金を親にだまって持ち出す」は家の中でみられるものであり、友達の影響を受けにくいと考えられる。また、「親にだまって外泊をする」（無断外泊）は、経験者に有意な違いがみられたのは2007年度のみであった。「親にだまって外泊をする」は非行傾向が比較的進んだ後にみられる行為であり、家族関係の影響が強いと考えられる。どちらの行為も他の行為と比較して友人の影響を受けにくいことから、年度がかわり集団が変わっても一定数みられる行為と考えられる。

2004年度までの調査を第１グループ、2007年度から2011年度までの調査を第２グループとして比較を行ったところ、2007年度から2011年度が、2004年度までの時期と比較して、「タバコを吸う」「親にかくれて酒やビールを飲む」、「店の品物をお金を払わずにもってくる」、「よその人の自転車を盗んだり勝手に使ったりする」の経験者が少なく、「病気などの理由がないのに学校をさぼる」、「子どもだけで夜おそくまで街の中で遊ぶ」の経験者が多い傾向がみられた。喫煙、飲酒、万引き、自転車盗といった他の比較的非行性の強い項目の経験者は、第１グループの方が多い。中学生の飲酒率、喫煙率の減少に関して、2008年にタスポが導入され、未成年がタバコを購入するのが難しいシステムとなったことや、2010年にタバコの値上げとの関連を指摘している研究がある（尾崎ほか，2011）。酒も未成年への販売は以前と比較して厳しくなってきている。中学生の非行傾向行為の変化には、子どもの環境や社会の変化も関わっていると考えられる。また、第２グループの「子どもだけで夜遅くまで街の中で遊ぶ」の増加には、携帯電話が普及し保護者も子どもの位置を把握することができることから、保護者の監督のない条件での行動時間が拡大したと考えられる。学校で問題となる行動が変化してきている可能性が指摘できる。

今後の展望

2015年の警察庁の報告において、刑法犯少年の検挙人員，触法少年の補導人員は、2010年から６年連続で減少している。また、不良行為少年も2012年度から４年連続の減少している（警察庁生活安全局少年課，2016）。本調査を開始した2002年度において、初発型非行は刑法犯少年の72.2％を占めていたが、初発型非行も2010年度以降、減少し続けている（警察庁生活安全局少年課，2016）。

少年非行が減少したことについて、いくつかの仮説が述べられている。土井（2016）は、子どもたちの期待水準が低いため、日々の生活に不満を覚えず逸脱する若者が減ったことや、人間関係の流動性が高まった結果、かつてのような友人関係の同調圧力の強い非行グループが存在しなくなったこと、大人との価値観のギャップが縮小し、大

人社会への反発する非行グループが形成されにくくなったことなどをあげている。また、河合(2016)は、この４年で少年非行が著しく減少していることから、ここ最近の子どもたちの生活環境の変化について言及し、特に、スマートフォンの普及、SNS の長時間利用の使用を原因にあげている。かつての非行グループではけんかや万引きは自慢の種であったが、現在はいけないことをしたということはSNS で自慢ができず、モチベーションがさがってしまう。つまりウケないために、非行の減少と関わるのではないかという指摘である。

戦後、少年非行はいくつかの時期に分けられその特徴が述べられてきたが、転換期が訪れている可能性がある。中学校における問題やトラブルもSNS の普及から変化しており、子どもたちの問題行動をより把握するために、実情に合わせた項目を設定しさらにその実情と関わる要因を検討していく必要があるだろう。

本研究は中学生の非行の動向について、主として環境や社会の変化から考察した。非行には、家族関係や友人関係、個人の要因など様々な要因が関連しているため、今後、それらの要因との検討も必要である。

引用文献

土井隆義．(2016)．少年刑法犯はなぜ激減したのか？－社会的緊張理論と文化学習理論の視座から－．青少年問題．第663号，18-25.

秦政春．(2000)．子どもたちの規範意識と非行・問題行動．大阪大学大学院人間科学研究科人間科学研究科紀要．大阪大学，26，123-155.

河合幹雄．(2016)．少年非行激減の刑事政策以外の要因を探る．青少年問題．第663号，26-33.

警察庁生活安全局少年課．(2016)．少年非行の情勢（平成27年１月～12月）．警察庁.

緑川徹．(1999)．初発型非行－豊かさが生みだす浮遊非行－．清永賢二（編），少年非行の世界（pp，36-65）．有斐閣.

小保方晶子・無藤隆．(2003) 中学生の非行傾向行為の実態と変化：１学期と２学期の比較．お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要．第１号，89-95.

小保方晶子・無藤隆．(2006a)．中学生の非行傾向行為の先行要因：１学期と２学期の縦断調査から心理学研究．第77巻５号，424-442.

小保方晶子・無藤隆．(2006b)．中学生の非行傾向行為と抑うつ傾向についてストレッサーとコーピングからの検討．お茶の水女子大学子ども発達教育センター紀要．第３号，65-73.

尾崎米厚・大井田隆・兼板佳孝・宗澤岳史・池田真紀・神田秀幸・簑輪眞澄・鈴木健二・樋口進．(2011)．中高生の喫煙状況と2010年のタバコの値上げの影響．中央調査報（№649）．http://www.crs.or.jp/backno/No649/6491.htm.